

川 眞人

医療法人玄真堂 川眞整形外科病院(大分県中津市) 理事長

南蛮流外科を学んだご先祖の遺伝子が覚醒。
骨髄炎の標準治療として川眞式局所持続洗浄療法を本邦に広め、
開業後も「高気圧医学」の研究成果を国際学会で発表し続ける。

ケンカの原因まで文章にさせた教師

生まれは大分県中津市。福沢諭吉の家が同じ町内にあり、子どもの頃はよく掃除をしていました。諭吉が偉大な人物であることを知ったのは、小学校5年生のときに松山均先生という教師に巡り会い、伝記を何度も読むように指導されてから。「とにかく文章にきなさい」という方針で、感想文からケンカの原因まで、事あるごとに書かされました。医師となり、苦しみながらも論文を書くことが楽しいと思えるようになったのも、元をたどればこの恩師のおかげ。今、ライフワークの1つになっている中津の医学史研究の芽もこの当時に生まれていたのだと思います。



郷里中津は「蘭学の里」。前野良沢や大江雲澤など先哲の足跡や功績を掘り起こし著作にまとめている。

南蛮流外科を学んだご先祖がいたことは後に知ったのですが、母は日本の女性歯科医の先駆け。そんな遺伝子が目を覚ましたのか、好きだった工学から医学へと道を変えて東京医科歯科大学に入学。中津藩の伝統である文武両道を大学でも体現し、空手と登山で体を鍛え、オーケストラではフルートを演奏。自治会長としてインターン制度の廃止を訴え、新聞編集長として多方面にわたる取材を行いました。文学から歴史、哲学まで、本も約1,000冊を読破。空手からは基本の型を身につけることの大切さを、自治会ではいかにして人をまとめていくかを学び、新聞会では広く社会や将来に目を向けるようになりました。

南蛮流外科を学んだご先祖がいたことは後に知ったのですが、母は日本の女性歯科医の先駆け。そんな遺伝子が目を覚ましたのか、好きだった工学から医学へと道を変えて東京医科歯科大学に入学。中津藩の伝統である文武両道を大学でも体現し、空手と登山で体を鍛え、オーケストラではフルートを演奏。自治会長としてインターン制度の廃止を訴え、新聞編集長として多方面にわたる取材を行いました。文学から歴史、哲学まで、本も約1,000冊を読破。空手からは基本の型を身につけることの大切さを、自治会ではいかにして人をまとめていくかを学び、新聞会では広く社会や将来に目を向けるようになりました。



文武両道を信条に、大学時代は空手の稽古に打ち込み、山にも登った。



「川眞式局所持続洗浄チューブ」を考案

卒業は学園紛争真っ只中の1969年。大学は混乱状態だったため、虎の門病院の試験を受け、レジデントとして卒業研修をすることになりました。整形外科の部長は、痛風の大家、御巫清允先生。朝7時頃から痛風専門外来を行うなど、臨床医が1つのことを専門とするには並大抵の努力では済まされないことを自らの背中ですし、私の生きていく方向性も示唆してくださいました。「病室は研究室、患者は教科書」との言葉は今でも心の支えになっています。

虎の門病院では、私の2大テーマの1つとなる骨髄炎との出会いがありました。20歳の女性で8年にわたって20回もの手術を受けていた患者さんが、1回の局所持続洗浄療法(灌流)で長期の瘻孔が閉鎖治癒し、笑顔で退院したときは信じられないほどの感動を覚えました。それから憑かれたように骨髄炎の研究に取り組み、もともと機械好きだったことから器具も改良。1つの回路が閉塞しても次々に回路を切り替えられる「川眞式局所持続洗浄チューブ」を考案しました。今では川眞式が灌流の標準治療ですが、72年に移った九州労災病院では支払い基金の査定が入り、支払いが行われなくなったこともあり。灌流によって医療費がどれほど節約できたかを示す証しです。その資料を持って基金へ説明に行ったり、国内外の学会で発表したりして、ついに保険採用となったときは、「骨髄炎治療の道が開けた」と心の底から安堵しました。

潜水士の骨壊死を日本で初めて労災認定に

九州労災病院では天児民和病院長(当時)のもと、臨床と研究に励みました。手術が夜の11時まで続く猛烈に忙しい病院でしたが、さらに天児先生から「潜水病に伴う減圧性骨壊死」という研究テーマが与えられ、臨床後、深夜2時まで実験や研究を続けるようになりました。もともと九州労災病院には多くの潜水病患者が高気圧治療を受けに来ており、彼らに骨壊死が頻発していることは先輩方の調査でわかっていましたが、さらに有明海の大浦漁協へ調査に赴き、血液や病理の標本、X線写真を解説。潜水漁民の労働環境は極めて厳しく、450人中56%にあたる252人に骨壊死が発生している現実を明らかにしました。73年からは減圧性



水滴は石をも穿つ。
力によらずして、
落ちることによって。

骨壊死の病態生理の解明と世界的な研究の意味を探ろうと、国際高気圧環境医学会や米国潜水高気圧環境学会、日米潜水技術専門部会などで毎年のように演題を発表。多くの国の研究者と国際的な高気圧・骨壊死グループともいうべき同志の輪を形成することができ、共同研究も始まりました。75年に潜函工*の両大腿骨頭壊死を日本で初めて労災申請した際も、「グループ」の協力が認定を得るのに大いに役立ちました。

*潜函工(せんかんこう)：水中や、地盤の悪いところに橋やビルを建設する場合、鋼鉄や鉄筋コンクリート製の大きな箱を地下深くに埋めて丈夫な土台にする。その際、潜水と同様、地下の高い気圧の中で作業をする専門職。

開業しながら国際学会に演題を発表

81年に天児先生が病院長を辞される際、私も大学人になるか民間人になるかという岐路に立ち、福沢諭吉の「独立自尊」の教えに倣って開業の道を選びました。開業しながら国際学会に毎年演題を発表することは容易ではありませんが、「苦しみの中から本当の楽しみが生まれる」という天児先生の言葉を思い出しながら、今も学術活動を続けています。開業後は、並行して取り組んできた「骨髄炎」と「高気圧」という2つのテーマを結びつけるべく、高気圧酸素治療の整形外科領域における効果を臨床ベースで研究し、国内外に発表。

医療費の節減効果も訴求し、骨髄炎の高気圧酸素治療も保険適用となりました。

私の好きな言葉に、高野長英の学問訓「水滴は石をも穿つ。力によらずして、落ちることによって」があります。一筋の道を深く掘り進めていけば、その井戸の底にこそ世界に通じる水脈がある。真のインターナショナリズムは外の世界にあるのではなく、自らの土着的な足場にある——。これは、天児先生から後年与えられたテーマである郷里中津の医学史研究の中で出会ったもの。私の経験からも合点がいくし、長く日本人が抱いてきた哲学をよく表しているのではないのでしょうか。これからの医療を支える若い人にこそ、この意味をかみしめ、腰を据えて一歩ずつ前進してほしいと思います。

かわしま・まひと

1969年東京医科歯科大学医学部卒業、虎の門病院整形外科専修医。70年東京医科歯科大学難治疾患研究所専攻生。72年九州労災病院整形外科。81年より現職。87年第10回日本骨・関節感染症研究会(現学会)会長、94年第29回日本高気圧環境医学会会長、2006年第107回日本医史学会会長、08年第3回日米宇宙・潜水・高気圧環境医学合同学会会長を務める。99年大分合同新聞文化賞、02年国際潜水・高気圧環境医学会2002年チャールズ・シリング賞、08年第21回日本臨床整形外科学会学術賞、同年第7回杉田玄白賞(小浜市)の各賞を受賞。